

SHIRAUMEKAISHIRAUMEKAISHIRAUMEKAISHIRAUMEKAI

所長だより

SHIRAUMEKAISHIRAUMEKAISHIRAUMEKAISHIRAUMEKAI



子、四を絶つ。

意なく、必なく、固なく、我なし。

先生は次の四つを絶った。勝手な心を持たない、決めつけをしない、執着しない、我を張らない。

子罕篇 9-4

「子絶四、母意、母必、母固、母我。」

自分によかれという身勝手な心(意)、「こうだ・こうしろ」と決めつけたり押しつけようとする心(必)、ものごとへ執着する心(固)、自分を押し通そうとする心(我)ー。この四つを先生(孔子)は絶ったというのです。

「子曰く」(先生がおっしゃった)というお決まりの語句から書かれていないので、これは孔子みずから宣言したことではなく、弟子たちの目を通して師の姿勢を書いたことばなのでしょう。

世の中はいわば「意、必、固、我」のぶつかり合いのようなものですからこれらをすべて絶つのは生半可な意志でできることではありません。「意なく、必なく、固なく、我なし」とは、悟りを開いた禅僧の境地にも似ています。禅宗では、利己心、欲望、執着心などいっさいを捨て去ってこそ煩惱ぼんのうから解き放たれ、世界がありのままに見えてくるといいます。『論語』の内容はおおむね現実的で、世に出るための処世術的な要素も含んでいますが、晩年の孔子は、四つを絶った禅僧のような境地で自分の理想とする「仁」の道を説いたのかもしれませんが。

いまの時代、自己主張をしないと生きていけない部分もあります。しかし、身勝手な心や利己心を絶つという生き方が、もっと尊ばれてもいいはずです。

子曰く、君子は徳を懐い、小人は土を懐う。

君子は刑を懐い、小人は恵を懐う。

よき人物は生きるうえで道徳を思うが、凡人は土地を思う。

よき人物は責任を思うが、凡人は恩恵を思う。

里仁篇 4-11

「子曰、君子懐徳、小人懐土。君子懐刑、小人懐恵。」



道徳に重きを置くか、自分の利害に重きを置くか。
それによって生き方はずいぶん違ってきます。

君子と小人を、「徳」と「土」、「刑」と「恵」ということばで対
比させ、君子(よき人物・人格者)のあり方を述べています。
「徳を懐おもう」とは、情や慈愛を大切に人間らしく生きたい
と思うこと。「土」は土地や国土のほか、「居場所」「故郷」の意
味もあるので、いま自分がいる場所、地位や安住できる場所
というニュアンスをくみ取れます。「土を懐おもう」は、自分の居
場所や地位の安泰ばかり思うこと。

「刑」には「法則」という意味もありますが、刑罰の刑ととらえれば、「刑を懐おもう」は、
行動するとき道義的な問題はないか、責任を取れるか自分に問うこと、あるいは責
任を取る覚悟をすることでしょう。

「恵」は利益や恩恵の意味のほか、「あわれみ」の意味がしっくりきます。「恵を懐おもう」
は、あわれみで責任を逃れること、また、それを期待することです。

小人だってもちろん人間ですが、こうして対比してみると、なさけなく、哀しい
存在です。利益や保身より、まず「徳」を思う人間を目指し
たいものです。



◎孔子とはどんな人物か

孔子は姓は孔、名は丘きゆう といひ、字あざな (元服時につける名前)は仲尼ちゆうじ。

紀元前552年に魯の国(現在の山東省南部)に生まれ、前479年に没しています。長身でがっしりした偉
丈夫で、数え74歳まで生きました。

若いころは下級役人だったという説もありますが、孔子自身が「吾れ試いられず、故に芸あり(私は
世間に用いられず、生きていくために仕事をしてさまざまな技芸が身についた)」(子罕篇9-7)と言
っているように、長く不遇時代を過ごしたようです。

弟子に教育をするようになったのは40代のころからで、世間によりやく認められるようになったの
は50代からという大変“遅咲き”の人でした。のちに53歳で魯の大司寇だいしこう(司法大臣)に任命されますが
、やがて国政に失望して国を離れ、69歳まで10数年にわたる亡命生活を送っています。

孔子のことばが、ただの理想主義者や宗教家のことばと違うのは、こうした現実生活のきびしさを知
る苦勞人のことばだからでしょう。『論語』は孔子の人柄そのままに、簡潔、平易、適切、ときに非
常に人間臭く人生の真実にふれています。それこそ「世界の古典」として読まれている所以でしょう。

(参照 中村信幸監修；心に響く「論語」 永岡書店)